

---

# 靴

ヤマダゴロウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

靴

### 【ZPDF】

N2239A

### 【作者名】

ヤマダゴロウ

### 【あらすじ】

赤い靴。異人。踊る少女。

紅い靴が欲しかった。

おひしたばかりの洋服に映えるような、そんな紅い紅い靴がほしい。

「そんな事言つてると、異人さんに連れていかれてしまうよ。」「私があまりにもうるさく騒ぎ立てたせいだろ。」冗談混じりに姉が言った。

紅い靴を履いてた女の子。異人に連れられて行っちゃった。

よくラジオから流れる歌。

軽快なメロディーのくせに、どこかもの悲しく、歌詞が怖い。

「それでも欲しいの」

姉の一言で、紅い靴への得体の知れない恐怖が襲つた。だが、私は紅い靴を履いた自分の姿を想像してにやにやと笑う。そう考えるだけすごく幸せな気持ちになれた。

紅い靴を履いた私は、大人っぽくて、なんて素敵なんだろ。

紅い靴が欲しい。

昼間、みんなが広場で遊んでいる中。

私は一人で、広場から近い川沿いの草原に向かつ。

そして座りこんで、ただ空を眺めてぼんやりと、妄想するのが好きだった。

そんな日が、何日か続いたある日。

「何をしているの？」

鈴のような可愛らしい声が、いきなり私の鼓膜をくすぐった。

「え…？」

「ほんにちは。」

驚いて振り向くと、そこには白い肌に、キラキラと太陽のような髪の毛の女の子が、私を見下ろして立っていた。

「きや…。」

彫りの深い顔。

幼心に『こわい』だの『気持悪い』だの思つてしまつた。知らずに私は、彼女を拒絶してしまつっていた。

「驚かせてしまつたみたいね。」

私達とは全く違つ容姿。

それなのに、喋る言葉は私と同じ。とても流暢。

彼女はくすくすと笑いながら、手にある傘をくるくると回した。

「何をしてるの？」

「あ…。」

見慣れない少女。見慣れない人間。

私は緊張してしまい、うまく言葉が出て来ない。顎ががたがたと震えた。

「空を…。」

「ん？」

「空を見て…。」

かたかたとかち合つ歯。自分でも、今何を言つたのか、いまいちよく分からなかつた。

「空？」

だが、彼女は私の言葉を聞き取つてくれていた。

「う…ん。」

「そつかー。空見てたんだ。」

自分は馬鹿だと思った。

彼女は、にこにこと私の顔を覗いた。

くるくる動く表情は、とても活き活きしていて、なんだか可愛い

「うん。」

違う…と、何故か言えなかつた。

別に空なんか見てやしない。私はただ、靴が欲しいと思つていただけだ。

私はつい、うなだれた。

「うわあ…。」

自分の彼女が声をあげた。

何事かと思い、彼女を見てめる。

彼女は空を見上げていた。

「すごい青空…。」

言われて、彼女の視線の向こひつへ、私も目を向ける。

「本當だ…。」

このまま上を見続けていればよかつたのだ。

首が疲れてしまつたので、私は首を回した。視界も回る。回る回る。

彼女の白いスカートが風に揺られる。

その時、私は見てしまつたのだ…。

「あ…。」

「ん?」

紅い靴。

白くて細い彼女の足に、紅はとても際立つて美しかつた。

「いいなあ…。」

「え?」

「すごい…似合つてゐる。」

彼女は、困つたように眉を寄せたが、すぐに微笑んで

「ありがとう」

と言つた。

色々な事を話した。

家族の事、学校の事、自分の事。

話してみると、話題が豊富で楽しかつたし、とても話し易かつた。

羨ましい。彼女は私が持つていない・とても欲しい多くの物を持つてゐる。

羨ましくて、妬ましかつたが、それでも私は彼女といるのが樂しくて仕方がない。

それからと言うもの、広場で遊んでいる友人の目を盗んでは、彼女へ会いに行つた

彼女と私は、仲良くなつた。

「可哀想にね」

「ああ、あの子…？」

「そここの女郎屋の孕み子なんだろ?」

「おお怖い。」

「母親も酷なことを…。」

「別にいいじやない。どうせ私達とは違うのだから。」

「確かに。あの面相じやあ。」

「アレは鬼子じや。」

彼女は異人なのだ。

ある日、私は見てしまつた。

母のお使いで町に出た。玉葱とにんじん。丁度もらつたものがきしてしまつたようだ。

「あら?」

一目で分かる、その髪色。太陽の光が揺れて、キラキラと綺麗だつた。

「おーい。」

私が呼び掛けるも、彼女は気付いていないのか、路地裏に消えてしまった。

「気付かなかつたのかな？」

呑気な私はそう考へ、彼女の後を追つた。馬鹿な子だつたのだ。私は。

路地裏の、さらに奥まつた所に小さな小屋があつた。  
そこには父親らしき人物がいて、彼女は頭を撫でられ、指で顔を上向かせられていた。

今更、言葉をかけられる雰囲気ではない。私はそつと立ち去りうかと踵を返した

いつも笑つている彼女の顔から、笑顔が消えているのは氣にはなつたが。

その小屋から、いつも一人で遊んでいる河原は近かつた。歩いて五分ぐらい。

待つていれば彼女はやつて来るだらうか？

そんな考へで、私は彼女を来るのを待つていた。

しかし、太陽の位置がかなり変わつてしまつたのにやつて来はしない。

今日は来ないのだらうか？

私は、腰をあげて、様子を見に小屋へ近寄つた。

近付くにつれ、悲鳴のような声が聞こえた。私は何事かと焦り、窓から中を覗いた。

室内は暗く、目がなれるまでに時間がかかつた。  
その間も、彼女は悲鳴をあげていた。

違う。悲鳴じゃない。

暗さに目がなれ、彼女の白い足と、猿のよつた男の体が見えた。

暗闇の中で、彼女は踊る。

鈴を転がしたような甘い声。

横になつて震えながら。彼女の足だけが宙を舞う。彼女はただひたすら、踊り続けていた

呆気にとられて眺めていたら、彼女と目があつてしまつた。

「嫌だ…。」

私の顔を見て、泣きながら言つ。

「見ないでっ！！」

私はその場から走り出した。

弱い私は逃げたのだ。

馬鹿な私は逃げてしまつたのだ。

次の日河原へ行つても、彼女の姿は見掛けない。その次の日も、その次の日も。

私は一言誤りたかつたのに。

紅い靴が欲しいと思わなくなつた。

彼女がいなくなつて随分たつ。彼女は今、何をしているのか。元氣でいるだろうか？

彼女は異人だつたのだ。

知らない人間に連れて来られた

彼女は異人なのだ。

赤い靴をはいて踊り続けた少女は、絞首刑の役人に、足を差し出してこう願つたそうだ。  
「どうか私の足を切ってくれ」と。

完。

(後書き)

童話『赤い靴（だつけ？）』を読んで、絞首刑の役人が少女の実の父親なら、なんだかロマンチックだな〜とか思つたり。  
暗い話を書くのが好きなようです。  
わけの分からぬ話をかくのも嫌いじゃなかつたり。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2239a/>

---

靴

2010年10月8日15時55分発行